

地域の概況

①自然

波照間は、石垣島の南西およそ 60 km に位置し、有人島としては日本最南端の島である。島のひとたちが、ベスマー（私達の島・我が島）と誇りと郷愁をこめて呼ぶ波照間は、島の周囲 14.8 km、面積 12.7 km²、最高標高約 60m で、山や川が無く隆起珊瑚礁からなる平たい島である。コバルトブルーの輝きが鮮やかな北浜（ニシパマ）それに続く、南の浜（ペーパマ）の南端には、天然記念物に指定されたミズガンピ（ハマシタン）が群生し、その周辺にはテリハボク（ヤラブ）の群落も見られる。また各集落にはフクギが屋敷林として大切に育成されている。

②社会・交通

島は、北・南・前・名石・富嘉の五つの集落からできている。島の中央部には、農村集落センター、ふれあいセンター、公民館、役場出張所、診療所、郵便局、駐在所、保健センター、すむづれの家、幼稚園、小学校、中学校等の公共施設があり、教育・通信・保健安全等住民の健康と生活の維持・向上に寄与している。島の人口は、516人、世帯数276戸（平成31年1月末現在）となっている。交通では、昭和63年から高速船二隻が一日3便運航。平成2年からは「フェリーはてるま」（196t）。さらに平成29年10月には、高速双胴船「ばいじま2」が就航している。現在では安栄観光の高速艇（上期4便、下期3便）と週3便（火・木・土）の貨物船が運行しているが、季節によっては波風が強まることも有り頻繁に欠航する状況で、安定運行が島民の切なる願いである。また、2007年11月30日までは琉球エアークommuterが、同年12月28日より2008年10月まではエアードルフィンが石垣空港へ就航していたが、エアードルフィンの運行停止に伴い、現在は路線が無い。しかし、空港ターミナルビルが新築され空路再開に向けた明るい話題もあり、交通インフラの改善に向けて取り組みが進められている。

③経済

さとうきびの生産は、島の基幹産業で、年間10000t～14000tのさとうきびが収穫され、波照間製糖工場で含蜜糖に精製している。平成26年1月18日には、新しい製糖工場が操業を開始し、機械化された工場で高い生産能力をあげている。また、土地改良事業や農業の機械化等により、一戸当りの収量は増えたが、近年はモチキビや玉ねぎの栽培、肉牛の飼育等、農業経営の転換期を迎えつつある。水田での稲作は鰹漁の繁栄や、さとうきび生産・中型製糖工場の導入で衰退し、鰹漁も衰微し、いまはその面影はない。島の北西部には第三種漁港が完成し、漁業従事者からなる組合組織の種浜（ナリパマ）による水産物加工施設・販売所が設定され、漁業の振興が期待される。商業港も整備されつつあるが、相次ぐ定期便の撤退や、欠航便のため、日本最南端という地理的優位性を生かした観光産業に大きな陰を落としている。また、日本法人「トリップアドバイザー」が発表する日本のベストビーチにおいては、日本の美しいビーチの上位に毎年選出されるニシ浜ビーチがあるなど、最南端を目指して訪れる観光客（年間約3万人）や若者達の思いは熱い。

④文化

昔から神の島と呼ばれた波照間は、由緒ある御嶽が大切に保存され、島の人々の尊崇を得ている。また、島の歴史は古く名所・旧跡や遺蹟等数多くの文化財が島内散在している。標式遺跡として県指定の下田原貝塚からは、約3500年前の住居跡が発見され、下田原式土器と呼ばれる土器は、その時代を代表する土器として有名である。その他国指定の史跡として、下田原城跡、先島諸島の烽火史跡にと1つとしてコート盛がある。島の民謡・古謡、言語等の特異性やオヤケアカハチ、ミウシクシシカドン、長田大主生誕の地としても、郷土歴史家の注目を集めている。祭事も多く、なかでも旧暦の7月の「ムシャーマ」の行事は、祖先の霊を迎えての豊年祈願・感謝の最大行事であり、数々の芸能のデモンストレーションが繰り広げられる。

平成6年には、星空観測タワーが完成し、日本最南端の天体観測施設として多くの天文ファンの人気を集めている。近年、南十字星の見える島としての関心も高まってきた。また、波照間地球環境モニタリングステーションも設置され、地球環境保全の一役を担っている。